

うつわの正面ど～れー古代人の認知ー

富井 眞（京都大学文化財総合研究センター）

京都大学アカデミックデイ 2017（2017/09/30 京都大学百周年時計台記念館）

1. 器の正面って、意識してますっ？

茶道ではしっかり意識



<<http://www.asoview.com/act/teaceremony/kyoto/are0262000/pln3000016656/>>より

日本料理でも

例：魯山人



『シリーズ 器と料理 和食器―盛り付け自由自在―』（同朋舎出版、1997年）より

フレンチでも

例：ベルナルド



『四季のテーブルセッティング―バリの食卓から―』（文化出版局、1994年）より

飲み会でも？



『大人のテーブルマナー』（主婦の友社、2004年）より

形の制約がないならば、**作り手が描いた絵柄**に従うことに。
でも、現代の日常ではあまり意識して生活していないかも。

2-1. 正面って、みんなわかるのぉ？



一番手前にある右端のお皿だけ向きが違うが、
そもそも、左の4枚も上下180°が逆かも。



絵柄があっても、一目では向きが**わからないことも**。絵柄もなかったら？

2-2. 正面って、作り手が決めるのぉ？



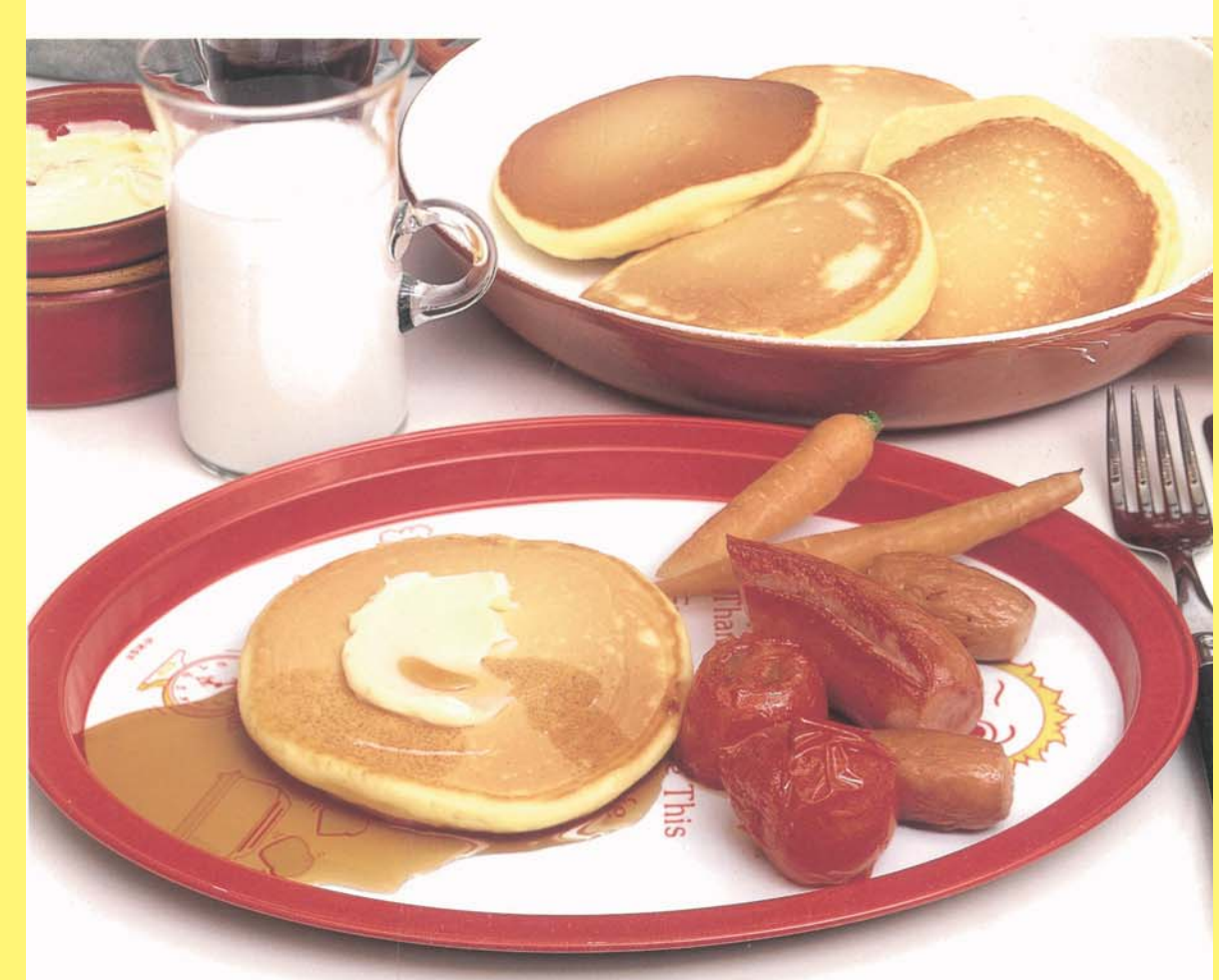
『シリーズ 器と料理 名窯名匠の器―盛り付け指南―』（同朋舎出版、1997年）より

絵柄の“落ち着き”に従ってではなく、食材の鮎の（川を上る）勢いを引き出すという、盛り付けをする料理人の“心遣い”によって（＝**使い手の意図によって**）、正面が変わっている。

アメリカあたりでは、日曜日のお昼に**パパが家族のためにパンケーキを焼くのが習慣になっている土地もあります**。子供たちもそれをたのしみにしているようで、傍から見ていても微笑ましい風景です。

パパのパンケーキ

アメリカあたりでは、日曜日のお昼に**パパが家族のためにパンケーキを焼くのが習慣になっている土地もあります**。子供たちもそれをたのしみにしているようで、傍から見ていても微笑ましい風景です。



『私のテーブルセッティング』（集英館書店、1989年）より

カジュアルな設定でも絵柄に従った盛り付けをしたと思われるが、写真写りの構図によって（＝**撮り手の意図によって**）か、正面が変わっている。

●年月を経て愛用しているうち、茶碗の所々に自然と浸み出てくる淡墨色の景色をいう。ごく稀に生じるので茶人が珍重。

作ったときにはなかった特徴が、使っている中で生まれてきて、**使い手の嗜好によって**正面が生み出される。

つまり、絵柄があってもなくても、**利用者の意識・嗜好・都合**で決まると言える。

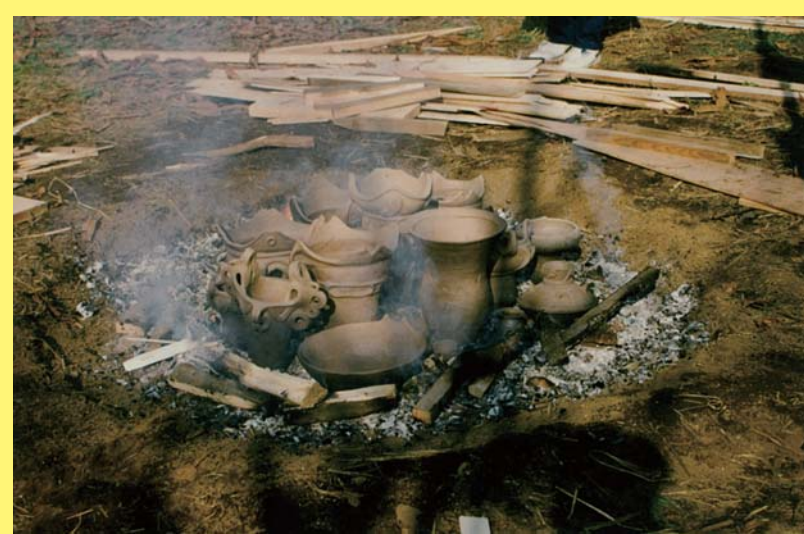
モノの、**作り方よりも使い方こそが**、人間の生活や習慣の基幹的な構成要素。ならば、**過去の文化を考える上で重要なのは、利用者の視点や行動。その状況は、遺跡に残る。**

3. 先史時代の土器は、野焼き。

茶道に使う近現代の器のような、窯で焼く技術はまだない。



1 予熱：水分を完全に飛ばす。



2 予熱：熱に馴染ませる。



3 燃烧準備：薪で覆う。



4 燃烧。



5 燃烧：薪を補充する。



6 燃烧。



7 余熱。



8 焼成終了

火を制御しにくいので、温度変化や薪との接触により、焼きムラがしやすい。

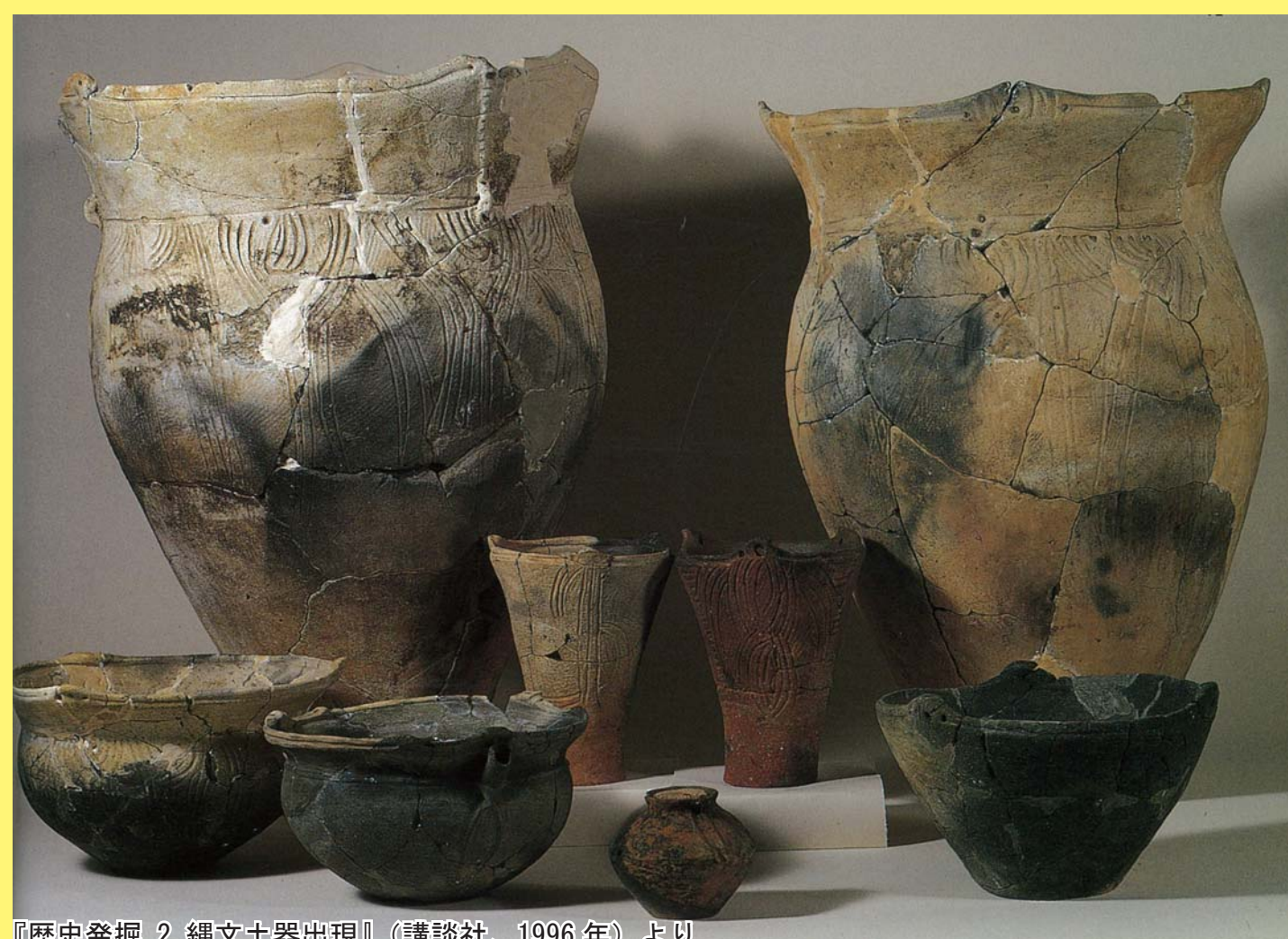
意図しないところにムラができる。



実物の縄文土器でも、見事な突起のすぐ下に、目立つ焼きムラがでてしまっている。

4. 古代の土器は絵柄がなく簡素。縄文土器の文様は判読ほぼ不能。

作り手の正面意識はわかりづらい。



縄文土器はムラやグラデーションができることが多い。



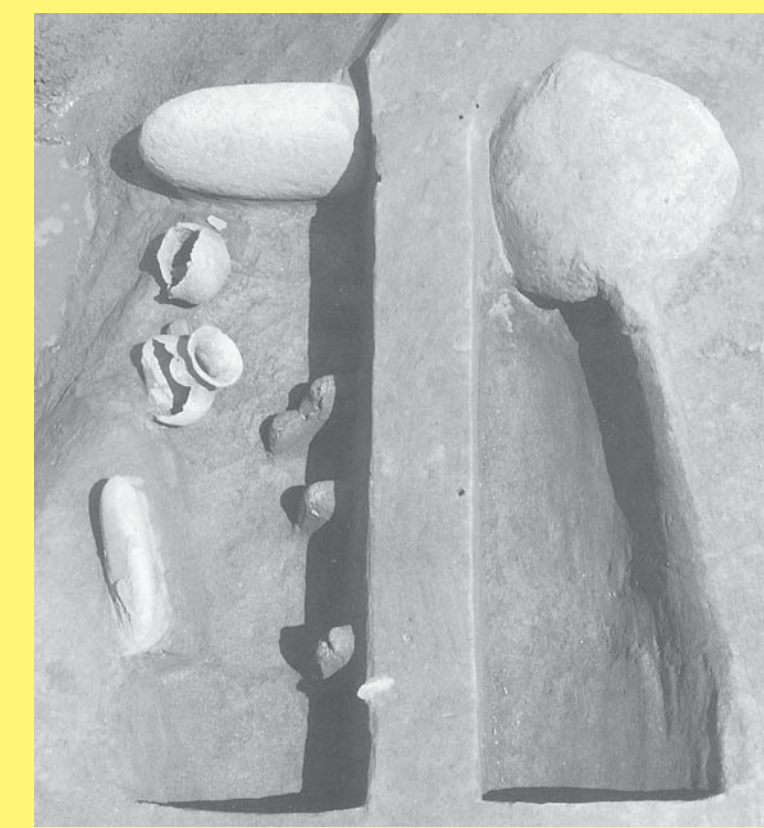
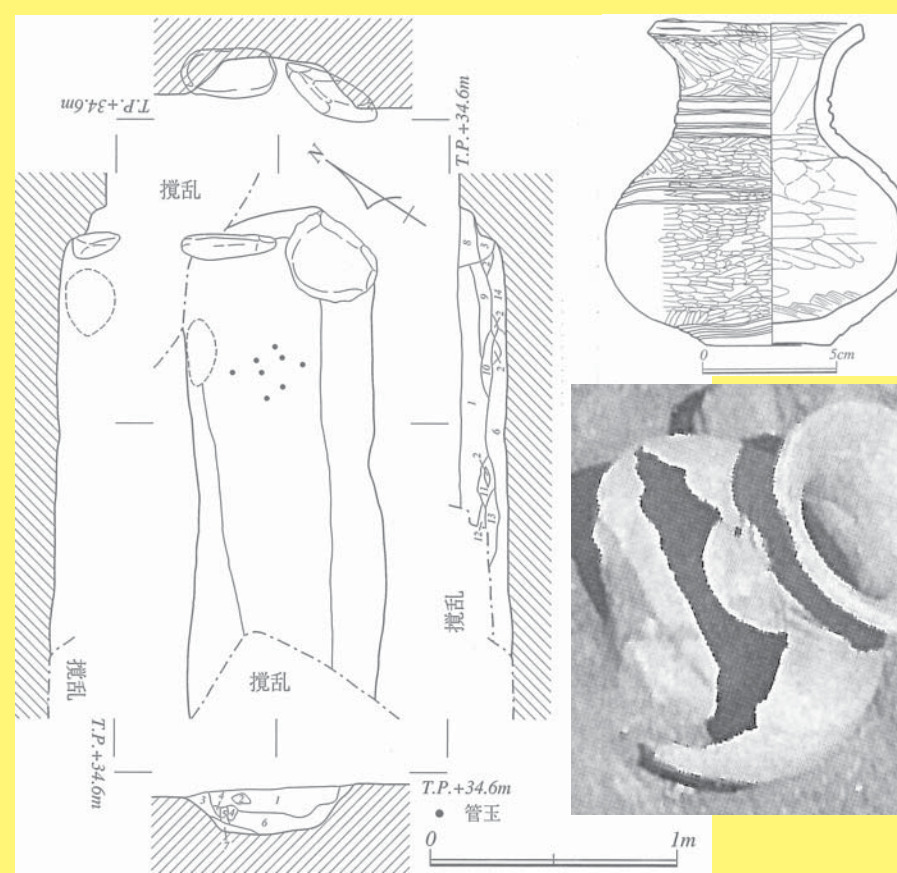
弥生土器はグラデーションが小さい分、ムラが目立つ。

5. 棺やお供えの壺の向きは発掘現場でわかる！

弥生時代前期の持田町3丁目遺跡（松山市）

現場記録は、『持田町3丁目遺跡』（愛媛県埋蔵文化財調査センター、1995年）より

お墓の供献小壺（SK08）

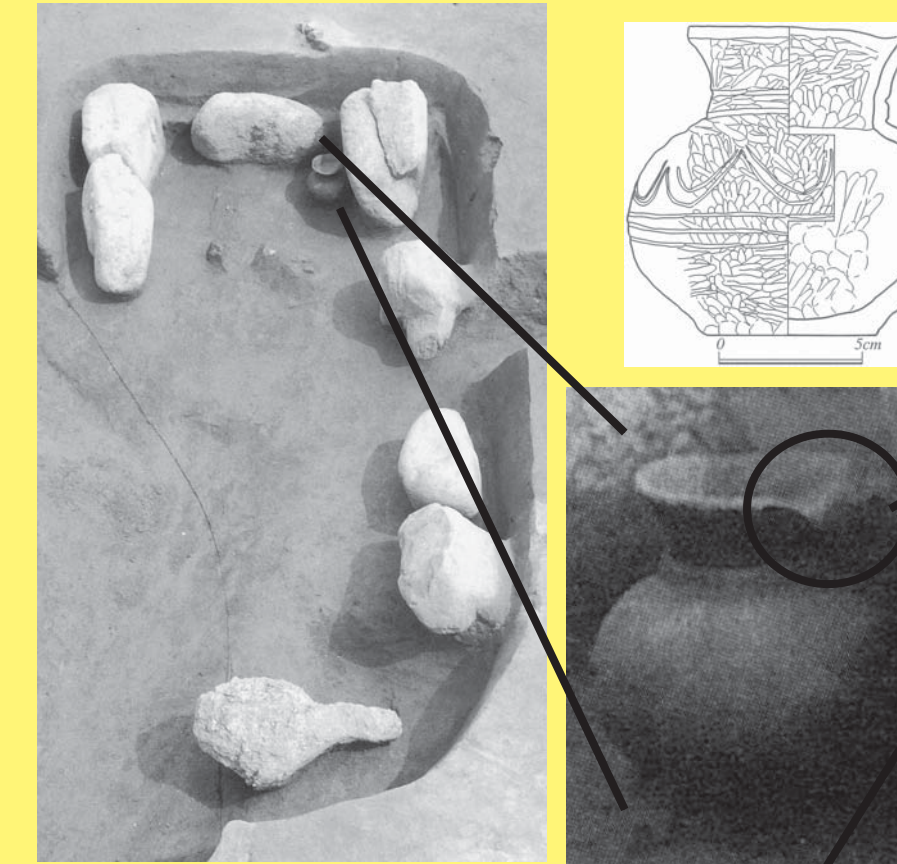


墓穴の側壁近くで出土した2つの小壺のうち、想定される遺骸の位置に近いほうの個体。

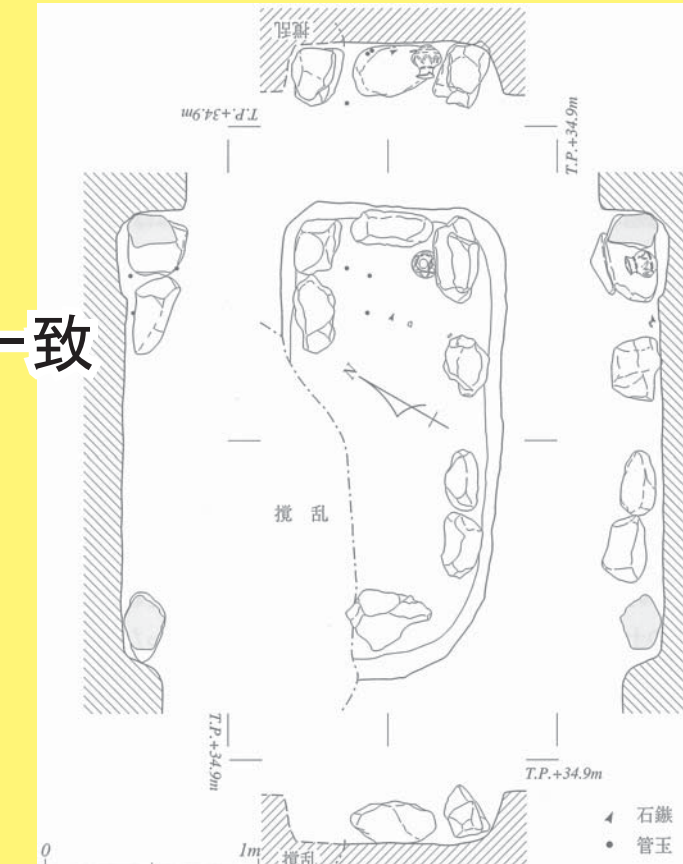
現代の配管工事によって破損されてしまった部分を手がかりにすれば、焼きムラのある側が、遺骸に正対していたことがわかる。



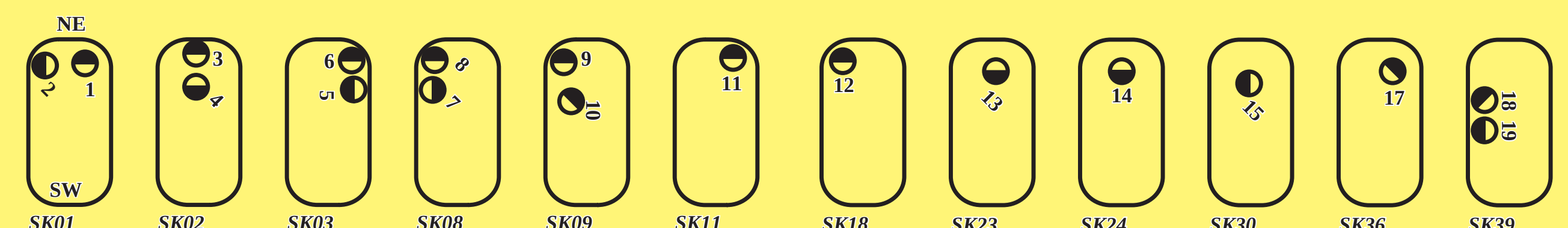
お墓の供献小壺（SK11）



割れの一致

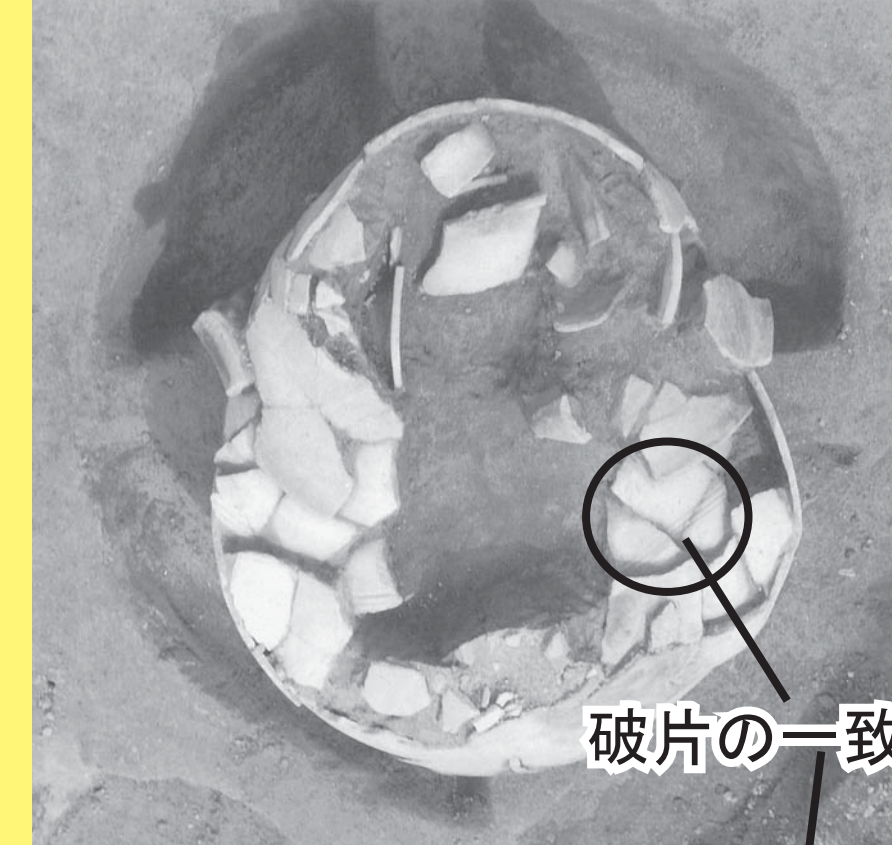
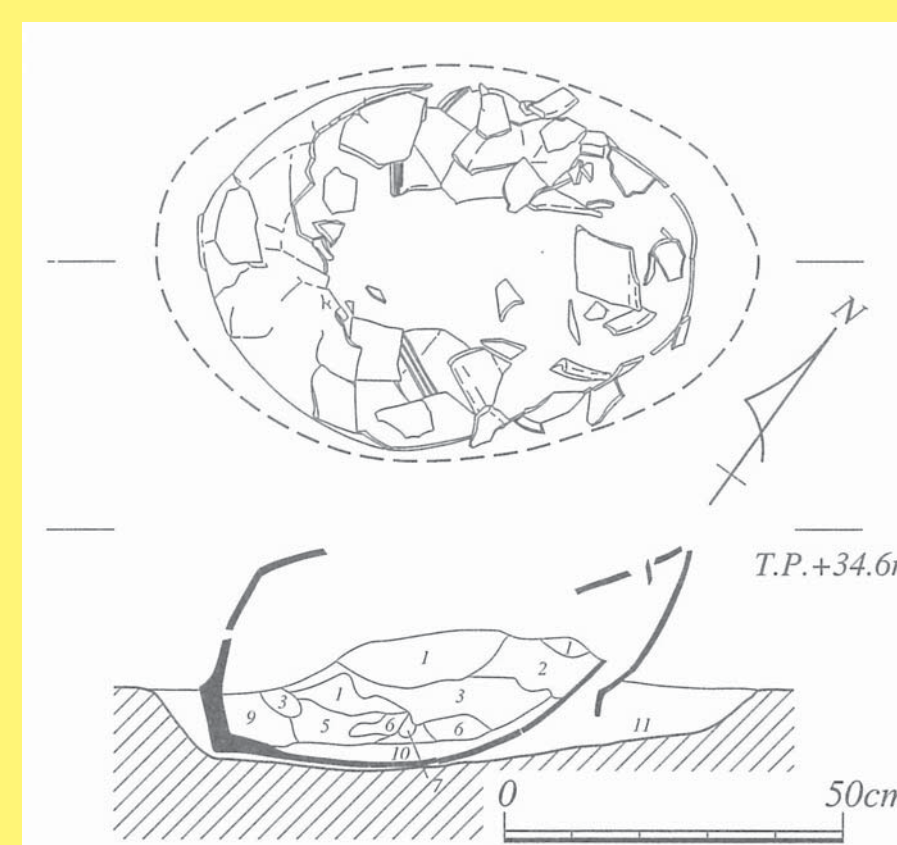


墓穴のコーナーで単体で出土した小壺。口縁部の割れた部分を手がかりにすれば、焼きムラのある側が、遺骸とは正反対になる棺外側を向いていたことがわかる。



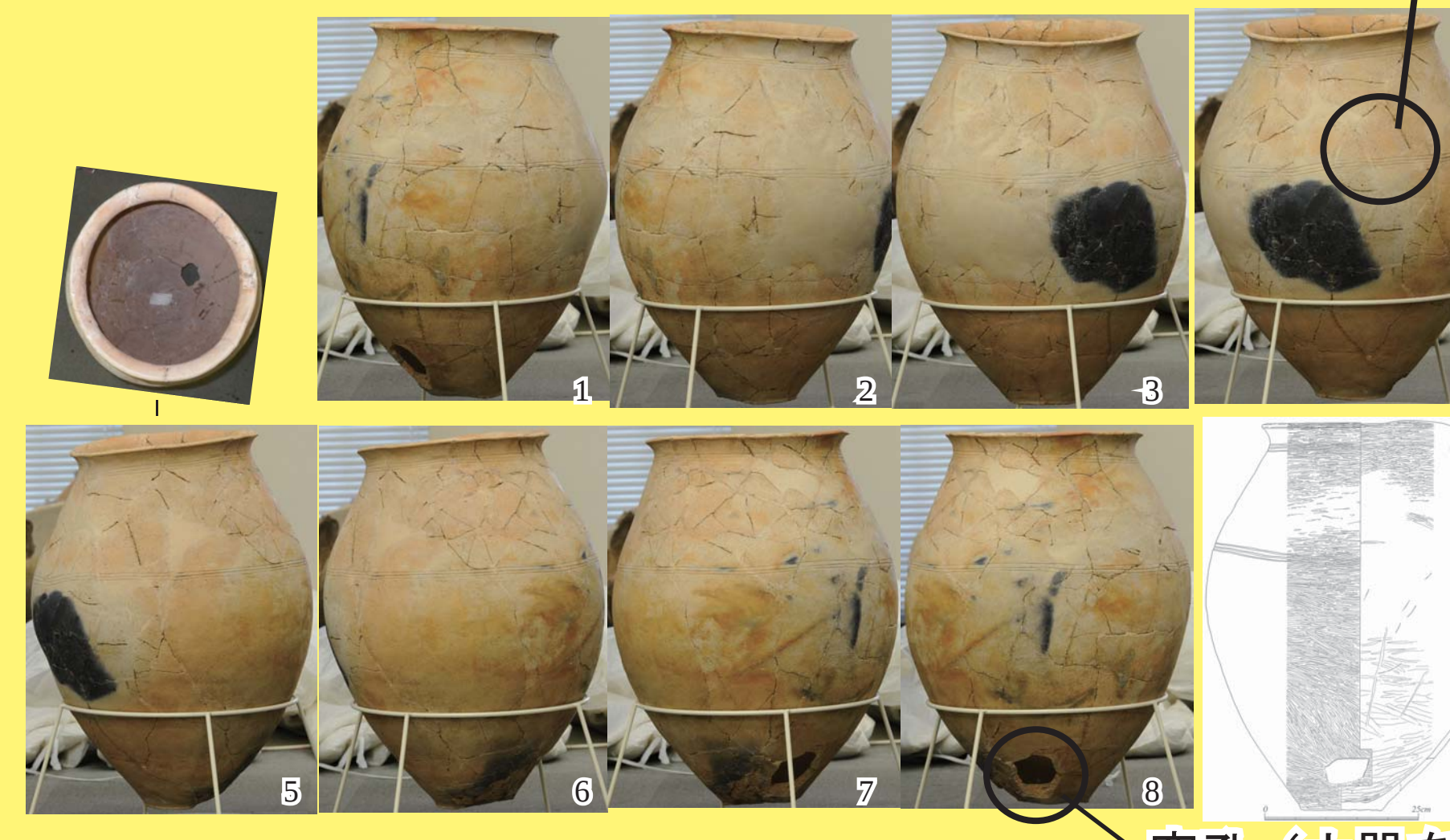
小壺の出土した墓を検査すると、焼きムラは、小壺が遺骸近くから出るときには正面とみなされ、遺骸から離れて出るときには背面とみなされていたと考えられる。

土器棺本体の大型壺（土器館1）



破片の一致

土器棺本体の大型壺。底面が穿孔されていた。胴部の破片の形状を手がかりにすれば、焼きムラが、天を向くようにして棺が据え置かれたことがわかる。焼きムラが正面として機能していて、その位置に応じて穿孔の場所も決まったのかも知れない。



穿孔（土器を焼いた後にあけた穴）

お墓でのお供えや棺という、特殊な状況・場面だが、焼きムラは、土器を使う人に強く意識されていたことがわかる。土器の全方位写真を撮り、20年前の**発掘現場の記録写真と照合**して、コンテクスト（=**出土の状況**）を解析した結果、古代人の認知に迫れた。**考古学の勝負どころは“現場”**なのだ。